

平成28年度

行政政策学類

推薦入学試験

小論文

問題冊子

時間 90 分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子はこの表紙を除いて / 枚です。
また、この冊子とは別に資料集、解答用紙、下書き用紙があります。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の受験番号欄には、必ず、受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。問題冊子及び資料集、下書き用紙は持ち帰って構いません。

<資料>は、大野更紗・開沼博『1984 フクシマに生まれて』（講談社、2014年）の「鼎談 ^{ていだん}<ゲスト>森達也 この国の人たちは、もっと自分に絶望したほうがいい」からの抜粋である。

資料を読み、社会の「集団化」現象をメディアとの関わりで説明し、それを踏まえたうえで、傍線部の「他者に対して優しい社会」を構築していくにはどうすればよいか、あなたの考えを述べなさい。

(1行20字詰め、50行以内)

(注意)

解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、括弧などはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。書き出しは1マス空け、段落変えの時は必ず改行し、1マス空けること。

平成 2 8 年 度
行 政 政 策 学 類

推 薦 入 学 試 験

小 論 文
資 料 集

時 間 9 0 分

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 資料集はこの表紙を除いて 10 枚です。
印刷不鮮明の箇所などがあれば、監督者に申し出て下さい。
3. 解答用紙の受験番号欄には、必ず、受験番号を記入して下さい。
4. 解答は、別紙解答用紙の解答欄に横書きで記入して下さい。
5. 解答用紙は持ち帰らないで下さい。問題冊子及び資料集、下書き用紙は持ち帰って構いません。

〈資料〉「鼎談」

〈ゲスト〉森達也

この国の人たちは、もっと自分に絶望

したほうがいい」(大野更紗・開沼博『一九八四 フクシマに生まれて』(講談社、二〇一四年)所収)

森 麻原の裁判は一審だけで打ち切られました。何も解明されないままに。本来ならありえない。でも早く吊るせとの声に、メディアも司法も従属しました。動機は事件を説明するうえで最大の要素です。ところがオウム事件は戦後最大規模の事件と言われながら、その動機を解明しなかった。ならば不安や恐怖が熾り続けることは当たり前です。その結果として危機意識はさらに高揚し、一人であることが怖くなります。だからこそ多くの人と繋がろうとする。つまり集団化のスイッチが入りました。その後の酒鬼薔薇事件であったり、9・11であったり、北朝鮮による拉致問題であったり、附属池田小事件であったり、様々な事件が起こるたびに集団化への意識は雪だるま式に大きくなり加速して、その果てに3・11が起こってしまった。

地震と津波は自然災害です。明確な加害者がいるわけでもないし、一般的な事件とは違う。でもあの直後は、社会全体が「後ろめたさ」的な感情を抱きました。英語で言えば「Survivor's guilt」。つまり「生き残っているがゆえの罪責感」です。東北以外の地に暮らす人たちの多くは、「なぜ彼らは死んで自分は生きているのだろう」とあのときに考えた。そして東北の遺族たちも、なぜ家族は死んだのに自分は生きているのかと考える。死は煩悶を迫ります。そして謙虚にさせる。後ろめたさは他者への想像力を刺激するかもしれない。ならばオウム以降に始まった集団化の方向にブレーキがかかるのでは、と考えました。でも結果は逆でしたね。大流行した「絆」という言葉が示すように、後ろめたさを振り払うために、さらに集団化の勢いが加速した。

開沼 つまり、オウム以降、3・11を経てもなお、社会は変わっていないということですか？

森 僕には、少なくともよくなっているとは思えません。むしろ、集団化が促進されたと思っています。

開沼 集団化もちろんですが、僕は近年の日本社会では、漠然とした被害者意識がせり出しているように感じます。先ほど森さんも被害者感情の共有について触れられていましたが、それとはまた少し違う文脈です。

たとえば、2004年のイラク日本人人質事件で人質となった被害者は、ひどいパッシングを受けました。パッシングをしたのは、日本においてメディアでその事件を見ているだけの人たちです。僕には、彼らが事件によってなんらかの被害を受けたとは思えませんでしたが、彼らは明らかに被害者意識を持って、人質を攻撃していました。この感覚は、震災以降の様々な動きの背景にも共有されているもののように思えます。

お話をうかがいながら、集団化と被害者意識がかちあっている状況が、95年から今まで続いているように思いました。これは95年以前にはなかったのか、あるいは別な形であったのか。被害者意識は、普遍的に社会のある種の浄化をしてきたのか、あるいは集団化を進めてしまう要因になったのか。95年よりさ

森、らに前から日本社会を覗てきた森さんから見ても、被害者意識はいつ生まれたものなのでしょう？ そして、そのあり方は変わってきていますか？

まず集団化について言えば、今始まった現象ではもちろんありません。四百四十万年前に樹上から地上に降りてきた人類の先祖は、直立二足歩行と同時に群れることを始めました。なぜなら地上には天敵が多いからです。単独では捕食されてしまう。こうして群れることは人類の本能となりました。

でも集団化は副作用が強く弊害も多い。集団内で異物を、そして集団外で敵を見つけたくなるんです。最も分かりやすいのは、9・11の後のアメリカです。愛国者法を作って国内の異物、つまりイスラム教徒を排除・排斥し、それからアフガニスタンとイラクに戦争をしかけました。特にイラクに対しては、存在していない大量破壊兵器を戦争の大義とした。集団は敵がいなければ強引に作りだすんです。こうして取り返しのつかない過ちを犯す。十字軍遠征にホロコーストに文革など、事例はほぼ無限に挙げられます。その意味では人類全般に共通した現象だけど、特に日本人は、集団化への相性がよすぎるんです。だから失敗も多い。

開沼 それは、ずっと以前から？

森

明治以降に顕著ですね。富国強兵などの国の政策と集団化の衝動が合致した。もちろんメンタルの部分でも、周囲との協力が不可欠な稲作文化だったことを考えても、同調圧力は昔から強かったのでしょう。ただ、やっぱりオウムによる一連の事件によって、アクセルが踏まれたことは確かだと思えます。

大野

森

被害者意識の共有化も、おそらくそんなに目新しいことはありません。殺す人がいれば殺される人がいるわけで、殺された人たちの遺族やその仲間が叫ぶ声高な正義みたいなものが次の争いに連鎖するという現象は、昔からありました。

集団化と被害者意識がからあっている状況が95年以降に加速したと開沼さんは言ったけれど、その背景にはオウム以外にもうひとつの要因があります。インターネットです。地下鉄サリン事件が起きた95年に、Windows95が登場しました。以降はネットが社会に急激に浸透しました。2ちゃんねるなどが典型だけど、負のルサンチマンが解放されやすくなった。被害者感情の共有化がネットを媒介に促進された。それによって、テレビ・新聞・雑誌という旧メディアも大きな影響を受けて、激変しました。95年以前のメディアの文法と、今の文法は全然違うと思います。

大野

森

具体的にはどのように変わったとお考えですか？
映像メディアが特に伝えやすいものは、論理ではなく感情です。そしてネットもどちらかといえば、活字より映像に向いています。さらに誰もがメディアになれるネットは匿名性が担保されるから、妬みや憎悪などネガティブな感情の発露と相性がいい。

そういうことが積み重なって現状がある。だから95年以降、オウムによって引き起こされた危機意識の昂揚と、ネットによって醸成された負の感情の共有が、社会の劣化の両輪になってしまったという気はします。

大野

大局を見た場合、メディアの進展によってどんな問題が生まれたとお考えですか？

森

たくさんあるけれど、根本の問題を挙げます。メディアとジャーナリズムが融合しすぎてしまった。もう少し分かりやすく言うと、ジャーナリズムの論理が

メディアの論理に回収されてしまった。

この場合のメディアの論理とは、要するに市場原理です。視聴者や読者が喜ぶから、この情報を商品として提供する。視聴者や読者が望まないから、あの情報は提供しない。株式会社、営利企業のロジックと言い換えてもいい。

でもジャーナリズムの論理は、市場原理とはまったく別のはずです。資本主義経済においてメディアが抱える問題は、これら市場原理やポピュリズム（ポピュリズム）にどうしても染まってしまおうということ。これは世界共通の課題です。でも、海外のメディアの場合は、軋みや摩擦が働く場合が多い。つまりジャーナリズムと市場の原理が拮抗（きうこう）している。

ところが日本人は、組織共同体と相性がいい。組織に個が従属しやすい。その帰結として個の論理であるジャーナリズムが、組織の論理である市場原理にあっさり回収されてしまっている。軋みや摩擦がとも少ない。これが日本のメディアとジャーナリズムにおける最大の問題だと考えます。

（中略）

大野

森さんは、東日本大震災の発生から十五日後の2011年3月26日に、映画プロデューサーの安岡卓治さんと四人で被災地に入られ、そこで撮影した映像を四人の合作映画「311」として発表されました。福島第一原発に車で接近したり、津波に流された子どもを探す親にインタビュしたり、とても生々しい映像の連続で、たいへんな物議を醸したようかっています。

その中でも最も衝撃的なのは、津波で亡くなった方のご遺体を映して、被災者の男性に棒を投げつけられるラストシーンです。ここがこの作品のピークであり、観客にとっては重層的に不快感がやってくるシーンです。津波で亡くなったため水で膨らんでいるご遺体が画面に映ることがまず瞬間的に不快。それから遺体を映しているのかと疑問に感じ、次にそれを自分が見ているのかという思いを抱く。結果、私は森さんが棒を投げつけられた時に「あ、やつぱり」と思ってしまった。それでもあのシーンを入れるという判断をされたのは、やはり必要だと思われたからですか？

森

もちろんです。必要と思わなければ入れません。

大野

……なぜ、ですか？

森

観客を不快にさせる要素は、全編を通してたくさんありますよ。原発に行く途中の車内で線量計の数値を見ながら四人で大騒ぎしていたり、被災地で夜にビールを飲みながらゲラゲラ笑っていたり。……不快に感じてほしいと思いがながら作った映画であることは確かです。

大野

「A」系の作品とは、少しスタンスが違いますよね？

森

やはり四人の合作であることが大きいと思います。ドキュメンタリーは一人称単数なんです。共同監督など本来ならありえない。その意味で「311」は、偶発的にできてしまった作品です。撮影中も作品にすることなど、ほとんど考えていなかった。自分の記録用にカメラを回していましたから。でもプロデューサーの安岡が、全員の映像を強引に編集して、一本の作品にしてみました。それは無理だよと思ったけれど、当時の自分が言いたいことはちゃんと織り込まれていると思ったので、そのまま編集作業を続けて、結局は映画になってしまいました。

大野 そういう経緯があったんですね。

森 最後の棒を投げられるシーンですが、僕だけではなく四人とも、あの瞬間にカメラのスイッチを入れています。温度差はあるけれど全員が、この局面は重要だと思っただのは確かですね。

大野 それはどういう理由からでしょうか？

森 被災地を回りながら、傍若無人なメディアに対して、なぜこの人たちはこんなにも寛容なのかという思いを抱えていました。誰かに怒られて当たり前なのに優しくされることへの不安。……ちよつと違うかな。うまく言えないけれど、とにかく妙にねじれた感覚がありました。メディアの一員である自分たちの加害性を映像にする。醜悪な自分たちの姿を隠さない。そしてそれは、このときに日本中を覆っていた後ろめたさ的な感覚にも、きつと繋がる^{つな}と感じていました。

だから、やつと怒りをぶつけてくれる人が現れた時に、この映像がもし映画になるならここがラストシーンかなと僕は思ったし、他の三人もそう思ったんでしょう。

開沼 あのシーン以外で怒りの感情をぶつけられた場面はなかったんですか？

森 ありませんでした。僕は阪神・淡路大震災の取材はしていないのですが、阪神・淡路大震災と東日本大震災の両方を取材した方に聞くと、被災者の反応が明らかに違うと言いますね。

開沼 どう違うんですか？

森 東北の人たちは我慢強いそうです。阪神・淡路大震災の時は、取材に行った人が怒鳴られたり物を投げられたりするようなことがあったらしいけれど、それが今回はまったくなかったと聞きました。だからこそ、取材しながら自分たちの業の深さのようなものを感じる、と。

開沼

でも森さんは、「従順な被災地の人たち」という、あの頃のテレビが描いていたステレオタイプな被災者像とは違うものを描きたかったんではないですか？^まそうです。当時メディアでは、被災者はみんなとてもポライト（礼儀正しい）でジェントル（紳士的）だと盛んに言っていましたよね。でも、開沼さんのご指摘どおり、それはとてもステレオタイプな被災者像です。いい加減にしろと内心うんざりしていた方もいます。確かにその傾向はあるかもしれないけれど、メディアはあまりに強調しすぎました。

同時に、日本人が未曾有の危機にあっても整然と活動していることを世界各国が絶賛している、という報道も繰り返されました。でも、実際には略奪的なこともあったと聞いています。確かに少なかつたかもしれないけれど、明らかに情報がフィルターで濾過^ろされている。つまり四捨五入です。

レベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』（大災害などが起こった時に、なぜ見ず知らずの人たちと支え合うような「特別な共同体」が立ち上がるのかを考察したルポルタージュ）によれば、こうした災害の後は地域や文化を問わず、人々は利他性を発揮して共同体を作るそうです。アメリカ西海岸で起こったサンフランシスコ地震の時に暴行や略奪があつたことは事実だけれど、そのことが強調されすぎている。逆に、日本の場合は暴行・略奪がなかったことばかりが強調されます。でも、それってどちらも事実が増幅されているわけです。実際は、地域によって人間の行動はそんなに変わらないだろうという思いはあつたので、東北の人たちがひたすらにポライトなわけではないということも少し滲ませたいとは考えていました。

開沼

なるほど。

(中略)

開沼

3・11から二年が経ちましたが、今3・11をどういうふうに捉えていらつしやいますか？

森

先ほどの話と重なりますが、日本人は結局、「後ろめたさ」よりも「集団化」のほうを選択しました。あの時期に後ろめたさがうまく機能すれば、もしかしたら社会がこれまでとは違う、ちよつといい方向に変わるかもしれないし、あるいは世界で今も起り続けている悲劇に対して、もっと関心を向けられるようになるんじゃないかと思つたけれど、結局はそうはならなかった。逆に、後ろめたさをなんとか誤魔化をうとして、みんなが「絆」という耳ざわりのいい内向きの言葉に歩み寄つてしまったという印象があります。

大野

森さんご自身も後ろめたさを感じられたのですか？

森

僕はある日、テレビドキュメンタリー番組の企画審査会で六本木にいました。審査会は中止になったけれど、帰宅しようにも電車が動いていない。時間は夕刻。やることは何もない。どこにも行けない。だから、審査会に来ていた地方局のディレクターやプロデューサーたちと居酒屋に行つて、さんざん飲み食いしました。

被害の状況を知つたのは、その日の深夜でした。被災地のテレビの映像を見ながら、多くの人々が津波に呑まれていたそのとき、自分はビールや焼酎を飲みながらグラグラ笑つていたことを考えました。啞然としました。でもどうしようもない。これはまさしく僕の現実です。消そうにも消せない行状です。

それから被災地に取材に行くまでは、家でテレビを観続けていて、さつきも言つたように、相当に鬱状態になつていたと思います。

開沼

森さんが2011年3月の時点で想像されていた、後ろめたさがうまく機能した場合に訪れたかもしれない「ちよつといい方向になっている未来」とは、具体的にどんなものですか？

森 他者に対して優しい社会です。被害者感情の表層的な共有ではなく、他者の痛みを本当に想像し、その構造に介入できる社会。

これも繰り返しになりますが、3・11の時に、東北以外の人の多くは、被災地の様子をテレビで観ながら、普通に生きることに罪悪感めいたものを抱いたと思います。それはまさしく、津波が来た瞬間にガラガラ笑いながらビールを飲んでいた僕自身にも繋がります。醜悪です。あまりに後ろめたい。なぜ世界はこれほどにアンフェアなのか、その煩悶の結果として、人々は自分の冷酷さに気づきます。

3・11前にも、ハイチや四川の大地震、インドネシアの津波など、たくさんの方が亡くなったことを僕たちは報道を通じて知っています。アフリカでは今も飢饉で多くの人が死んでいる。砲弾に家族を殺されて悲嘆する人たちもたくさんいる。でもこれまでは、あくまでも遠い世界で起こった災害でした。ニュースを見て悲惨だなあとため息くらいはついたかもしれないけれど、次の瞬間にはバラエティ番組を観て笑い、普通に夕食を食べている自分がいたわけです。ある意味でしかたがない。人は忘れないと生きていけない生き物です。他者の苦しみや不幸にいちいち等身大に感応していたら、日々の生活が送れなくなる。

でも、日本で未曾有の大災害が起こったことで励起した後ろめたさが増えかけてとなって、自分がアプリアリに保持している冷酷さに気づく人たちが増えるのではないかと考えました。ならばたとえば、アフリカの飢饉やシリアの避難民、パレスチナの現状や途上国のスラムなどの悲惨な現実に対して、様々な気持ちが喚起されるかもしれない。今も助けを求めている人、苦悶の声をあげている人、世界に絶望している人は、この地球上に何億人もいます。彼らに対して日本は、これまでとは違う気持ちを持てるようになるかもしれないと考えました。

大野 でも、その期待は裏切られてしまったのですね。

森 ……まあ、一方的な期待ですから。ただしこれほど見事に集団化の方向に転がるとは予想できなかった。

震災直後の都知事選では、石原慎太郎が圧勝しました。その後の大阪府知事選と市長選では、維新の会と橋下徹が勝利し、2012年末の衆院選では自民が圧勝です。この結果は予測していました。なぜなら集団は号令を求めます。つまり強いリーダーが欲しくなる。ああ、やっぱりこっちにくるのかと嘆息しました。

森 オウムも含めてどんな大きな事件・出来事でも、時間の経過とともに風化するのとは当たり前だと思っています。風化は必要なことです。

大野 そうですね。人が忘却しない生き物だったら、あつという間に壊れてしまうでしょう。

森 でもどのよう風化するかは重要です。原発の問題にしても被災地の問題にしても、結局は美辞麗句ばかりがメディアを覆ってしまつて、本来伝えられるべきことが伝えられていません。

一方で、原発を維持するか撤廃するかという二項対立的な議論ばかりが前景に出てきて、様々な利害関係に翻弄され、簡単に二者択一ができない立場の人たちに対する視線は、とても脆弱になっています。

大野

そうですね。

森

安易な比較は乱暴だと思うけれど、たとえば水俣病が社会問題になった時は、もつとバリエーションのある視点を、いろいろな人が提示したような気がします。ところが福島あるいは被災地については、メディアからも個人からも、幅のある視点がありません。政府や国民やメディアが長く目を逸らしてきたからこそ、あれほど多くの人が苦しみ、助けを求めながら死んでゆきました。さらに地域内で差別問題まで発生しました。肯定などできるはずがない。でも何年も過ぎてからとはいえ、もつと重層的な眼差しが向けられていたような気がします。だからこそドキュメンタリーの分野でも、とても多くの名作が残されました。でも特に福島においては、全体的な視線が現状において、何となく一律になってしまっているという印象を受けます。不謹慎という言葉が典型だけど、異論を言いがらいいという雰囲気が強くなっているのではないかと気がします。

開沼

そうですね。水俣や沖繩の話には相当な多様性があり、単純な二項対立ではありませんよね。僕は、単純な二項対立の暴力性が自覚されることが気になっています。害の部分がとても大きくなっていると思うんです。

二項対立の狭間にいる人の中にいてあぶり出されなければならないのは、要するに弱者なんです。一昔前は、たとえば左派の中にもそういう人たちに目を向け、彼らの声を聞く余裕があったんだと思います。共感能力があったと言えはいいのかもしれませんが。戦争や貧しさを実体験として知っている世代は、弱者の中にさらなる弱者がいるということを知っていたのではないのでしょうか。

原発を無くしてほしいというのも弱者の側からの発言だと思っけれど、すべての弱者が反原発派なわけはありませんよね。でも、弱者への共感の視点が失われた結果、どちらの立場も選ぶことはできないという逡巡は無視され、強引に原発反対／賛成という二つの立場に回収されてしまっています。その結果、現実感のない綺麗な二項対立ばかりが目立つのが現状です。

大野

白黒はつきりつけないと気が済まない人が多いんですね。グレーゾーンが許されない社会になりつつあります。

開沼

僕は、共感能力の喪失は、なぜ集団化が加速したかということへの一つの説明になるのではないかと考えています。

開沼

先ほどからずっと同じことを言うかがつてしまっているように思いますが、3・11という問題において、戦後日本の他の問題よりも悪い形で集団化の影響が現れていることについてはどうお考えですか？

森

かつてと変わった最大の要因はメディアです。この二十年でメディア状況は大きく変わりました。その帰結として、煽られる民意もスケールアップしています。さらに民意は市場原理としてメディアの側にはね返ってくるので、相互作用で今度はメディア側が刺激を受ける。相互作用は昔からあったことですが、より大規模になっていると感じます。

今のこの社会は、二十年三十年前とは全然違う速度で動いています。だから、水俣と福島に関する言説に差があるのは、メディアが変わってしまったからだとするのが大きな理由の一つだと思います。でもメディアは社会でもあるのだけ。

開沼

9・11の時、テレビの中で、海の方の貿易センタービルが倒れた際に生まれたイメージ上の政治が、東京から二百数十キロしか離れていない福島でも起こるといのが、僕にとっては衝撃でした。

森

イメージ上の政治？

開沼

はい。実体験に基づかずに、どちらが敵でどちらが正義か、想像の中だけで肥大化した課題が政治を動かしてしまう状況です。

森

福島第一原発が最初に爆発した時、東電は「想定外」だと言って激しく叩かれたけれど、あの時同時に「自分も想定外だった」と思った人は少なかつたと思う。これもまた後ろめたさです。自分も加担していたわけですから。その時の自分の気持ちを保持できていれば、こんなに簡単に二分化していないだろうと思います。でも重荷を引きずりたくない。早くすっきりと整理したいという気持ちが生えた。その結果、メディアとの相互作用の中で、原発推進派と反原発派という分かりやすい二項対立が提示され、メディアもそれに応えるという形で、今の構図になってしまったんじゃないかと思えます。

開沼

よくない方向に整理されてしまったということですね。

森

やっぱり整理整頓せいとんってよくないですね。かつてメディアの黎明期、具体的には映像と音声のメディアが誕生して世界に広がり始めた二十世紀初頭、これからメディアが進化すればするほど、今まで不可視だった領域にも光が当たり、よりよい社会が実現できると誰もが思っていたはずですが、ところが、実際は逆でした。より不可視の部分が増えるし、二項対立の圧力に押されて弱者はより声をあげづらくなる。この現状は、メディアの進化抜きには語れません。

(中略)

森

3・11の後、原発事故を経て、「日本は変わる」と多くの人が口にしていました。実は僕もその一人です。これはさすがに変わらざるを得ないだろうと思っていました。でも、あつという間に元に戻ってしまった。原発再稼働や輸出を主張する自民党が選挙で圧勝するなど、当時はまったく予想もできませんでした。みんなメンタルが強いんだなとびっくりすると同時に、言葉があまりにも早く復旧してしまったという気がします。絶句するのなら、もっと長く、徹底して絶句すべきでした。

大野 開沼さんの著作に『フクシマの正義「日本の変わらなさ」との闘い』という本があります。本のタイトルにある日本人や日本社会の「変わらなさ」は、こんなにも強靱つよじんなものなのかと考えると、絶望的な気持ちになります。

森 開沼さんは一貫して「日本の社会は変わらない」と言い続けている。見事に見抜いていたと思う。ちょっと浮かれていましたね、僕は。

開沼 森さんはちゃんと取材されているし、独自の視座があつてのことです。違います、ろくに現実を見ようとせず、はじめから「変わる」と言いたがる人の多さにはうんざりしました。現場に行ったら、誰でも気付くと思いますよ。ちょっとやそつとではいい方向に変わりません。

森 入って、あんまり変わりたくないんですよ。正確には、変わりたいという気持ちと変わりたくないという気持ち、両方を持つている。だからこそ震災後初の衆院選で、長らく日本の政治を担ってきた自民党が圧勝した。原発・津波・地震と外的要因があまりに大きく揺れ動いて変化への予兆を必要以上に感知したために、変わりたくないという意識が急激に突出した。……もちろん要因はそれだけじゃない。東電への苛立ちや原発安全神話を容易く受容してきてしまった自分への後ろめたさなどが、民主党への自発的なネガティブキャンペーンと化学変化を起こしながら、自民党がちらつかせた目先の経済にスライドしたとの見方もできる。この場合もやっぱり、「日本をとりもどす」的な軽薄なフレーズが消費されましたね。

大野 今日森さんのお話からは、社会は3・11後、むしろマイナスの方向に変わってしまったという印象を受けました。

森 いいか悪いかということ言えば、決していい方向には変わっていないと思います。

集団は内部に異物を探したくなるし、外部に敵を見つけたくなる。ちょうど日本における集団化の進行にあわせるかのように、ヘイトスピーチなどの問題が表面化すると同時に、尖閣諸島や竹島などの領土問題を契機に新たな仮想敵国が出現しました。社会は絶望が足りないとき言ったけれど、僕自身はかなり絶望しています。悲観的にならざるを得ないというのが、正直なところです。

(問題作成の都合上、本文の一部および見出し・小見出しを省略した。また、一部のルビおよび注は出題者がつけたものである。)

(注1) 一九五六年広島県生まれ。映画監督・作家。代表作として、オウム真理教内部に入り信者たちの日常を追った『A』や、東日本大震災を取材した『311』(共作)といったドキュメンタリー映画などがある。

(注2) 怨恨・憎悪・嫉妬などの感情。

(注3) 一般大衆の考え方・感情・要求を代弁しているという政治上の主張・運動。

(注4) 紋切型。常套的な形式。また、型にはまった画一的なイメージ。

(注5) エネルギーが高まること。

(注6) 先験的。

平成28年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

行政政策学類 推薦入試

<資料>大野更紗・開沼博『1984 フクシマに生まれて』（講談社，2014年）

本書は、大野・開沼両氏がゲストを招いて行った鼎談集である。資料は、映画監督・作家である森達也氏との鼎談の一部である。

資料では、オウム事件以降、人々の感情的な同調圧力が強まり、社会の集団化が促進されたことが指摘されている。そこでは多数者とは異なる意見の持ち主は排除され、多様な見解や価値観は圧殺される。この要因のひとつとして、インターネットだけでなく、本来は現実を伝えて明らかにすべきジャーナリズムが、市場原理に服従し、一般受けする情報を最優先しステレオタイプ化されたイメージを供給するメディアの論理に回収されてしまっていることを挙げる。3.11 原発震災を経た今、被害者感情の表層的な共有ではなく、他者の痛みをリアルにえぐり出して、その痛みをリアルに想像してその構造に介入できるような「他者に対して優しい社会」をいかに構築していくべきかを問う。そこで、あえて生の不快な現実や多様な観点を伝えるドキュメンタリー映画の存在意義等を考察しているが、森氏は日本社会の変化の見通しは明るくないという。

本問で問うのは、たとえ資料中の個々の事件を知らなくても、メディアの役割と社会の集団化現象について3.11 原発震災を事例に読み解き、他者に配慮し、弱者へのまなざしを大切にして平和的に共生する市民社会の形成に向けた受験生自身の主体的な意見である。戦後70年を迎えた現在、一部には極端にナショナリスティックな言動やそれに関連する諸問題（ヘイト・スピーチ等）が浮上している中で、こうした議論は不可避であろう。法・地域・行政・社会・文化等を学ぶ本学類の受験生には、自己の学芸への主体的な関わり方や自己自身の生き方を見据えて思索してもらい意味も含めて、合理的かつ論理的に自己の意見の構築と展開をすることを期待したい。